

## 応援メッセージ

“A VUCA World“の今、世界のグローバル経営者がもっとも重要視しているのは、やはり「テクノロジー」です。

技術はイノベーションを創出し、そして新しいビジネスや市場を起こします。テクノロジーが次の成長の波を生み出す原動力となっていることは、今も昔も変わっていません。また、新ビジネス・市場創出だけでなく、従来のハードウェア製品・ソフトウェア製品販売やサービス販売から顧客のバリュー・チェーン全体に対してのソリューション・ビジネスへの価値移動を促します。つまり、ビジネス・モデルそのものの変革にも影響を及ぼしています。

インダストリアル・オートメーション（IA）産業の世界も例外ではありません。“Digital Transformation!”のもと、まったく違う文化を持つ OT(Operating Technology)と IT(Information Technology)の融合が始まっており、AI、DLT（分散型台帳）、ロボティクスなどのさまざまなデジタルテクノロジードライバがこの変化を指数関数的に加速しようとしています。

2018年はちょうど明治維新から150年目にあたりますが、150年前の当時丁髷で脇差姿の侍がまだ闊歩していた時代から現世までの変化は周知のとおりです。人々は刀をスマートフォンに持ち替え、黒船来航は今度はデータ大航海時代に入りました。この150年で起

きた規模と同じ規模、あるいはそれ以上の変化が、おそらく次は15年のうちに起こるでしょう。

テクノロジーの進化はあまりにも早く、進化による変化予測はさらに困難を極めます。

“技術立国日本”、これが私たち日本の誇りでした。先人たちの弛みない努力によって、日本は数々の技術を持って世界に貢献してきました。最近はどうでしょうか。デジタル世界の変化のスピードには周回遅れになっています。そのような状況において、日本が世界に、そして科学の進歩に今後も貢献できるとすればそれは「基礎科学」の領域ではないかと思っています。一般に理学と呼ばれている自然科学における基礎科学には、物理学、化学、生物学、地球科学、天文学などの基礎となる理論的研究があります。この基礎科学には少なからず時間が必要です。株主最優先の欧米の民間企業では、多くの時間を費やす基礎科学は敬遠され、“Make or Buy”のもと「よい基礎科学が外部から購入すればいい」という傾向です。

過去日本からは素晴らしい基礎科学が誕生しています。基礎科学を手塩にかけて育てることこそが「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国」である日本らしさではないでしょうか。日本の研究力が低下していくことはそのまま日本という国が世界の中でますますそのポジションを失っていくことと同意です。

ノーベル生理学医学賞を受賞された大隈先生が創立された大隈財団の高い志に私自身も大きな感銘を受けています。

次世代の、さらにはその先の世代にも私たちは負の財産ではなく「研究」という場を通して基礎科学の基盤という「正の財産」を渡すことが望まれます。本財団がその一役を担うことを心から祈念致します。

2018年6月14日  
横河電機株式会社  
常務執行役員 兼 マーケティング本部本部長 博士（学術）  
阿部 剛士